

ピエール・メルテンスの小説に見るカフェ表象と 「ベルジチュード」——『亡命地』を中心に

山内 瑛生

はじめに

ブリュッセル出身の作家、ピエール・メルテンス（1939～）は、現代ベルギー・フランス語圏を代表する小説家の一人である。1976年、彼は、社会学者のクロード・ジャヴォーらとともに「ベルジチュード *belgitude*」という概念を提唱した。この言葉は、後に詳述するように、エメ・セゼールやレオポルド・サンゴールが推進した「ネグリチュード *négritude*」運動を参考にしたもので、ベルギー人のアイデンティティの不安定さを前提としたうえで、なお「ベルギー人」であろうとする作家の態度の表明と言える。

1978年発表の『亡命地 *Terre d'asile*』は、中でも「ベルジチュードの象徴的な作品¹」と評価されている小説だ。チリのピノチェトによるクーデターとその後の圧政を逃れ、ブリュッセルに辿り着いた政治亡命者を主人公とするこの作品では、外国人の目から見たブリュッセルの人々の姿が描かれ、彼らの特徴が徐々に浮き彫りになっていくが、その過程でカフェという空間が重要な役割を担う。カフェは、メルテンスの小説において不可欠な要素であるベルギー・アイデンティティの問いを導き出す空間となっているのである。

本稿では、ベルジチュードの概念がメルテンスの小説におけるカフェ表象とどのように関連しているのかについて、特にベルギー・フランス語文学史とブリュッセルのカフェ文化史との相互関係に着目しながら論じる。これまでほとんど指摘されることのなかったメルテンス文学におけるカフェ空間の機能を詳細に検討することで、ブリュッセルのカフェがベルギー・フランス語圏文学において果たしてきた役割を捉え直すことも可能になるだろう。

第一章 ブリュッセルのカフェ文化とベルジチュード

『亡命地』の具体的な分析を行う前に、まず小説の舞台であるブリュッセルのカフェ文化史と、ベルギー・フランス語文学史の中でメルテンスがベルジチュード概念を提起した時期の占める位置がどのようにかかわっているのかについて述べたい。

18世紀から20世紀半ばにかけ、隣国フランスの首都パリのカフェが、文学者や芸術家の集合場所として栄えたことはよく知られているが、ブリュッセルでも19世紀後半よりパリと同様にカフェで作家たちが集まるようになる。その初期の例として、『若きベル

ギー *La Jeune Belgique*』誌の作家たちによるカフェ・セジノ (le café Sésino) での集いを挙げることができるだろう²。モーリス・マーテルランクやエミール・ヴェラーレンなど、世紀末ベルギーを代表する象徴主義作家がこのカフェに集まり、オランダ語圏に比べて遅れて始まった、ベルギー・フランス語圏における「国民文学」の確立を目指した³。「我々であろう *Soyons nous*」というスローガンを通じて『若きベルギー』誌の著者たちが主張したのは、「フランス文学」とは異なる自立した「ベルギー文学」の創造であり、「1881年の第一巻における読者への呼びかけは、それまで制度化はおろか、ほとんど発展もしていなかった国民文学を創り出そうという点については明確だった⁴」のである。彼らの多くは、「ヴラーンデレン系フランス語作家」であり、「ヴラーンデレン性」を明確に打ち出すことによって「ベルギー文学」に特殊性を付与しようとした点も注意すべきだろう⁵。このように、フランスという「中心」からベルギーという「周縁」へと文学者たちが離れていく時期のことを、文学史家ジャン＝マリー・クリンケンベルクは「遠心的段階 *phase centrifuge*」と呼んでいるが、この傾向は 1920 年頃まで続くこととなる⁶。

しかし、その後、逆にベルギー・フランス語文学をフランス文学へと同化させようとする「向心的段階 *phase centripète*」が訪れる⁷。この変化は、ヴラーンデレンとブリュッセルでオランダ語が公用語となったためにオランダ語そのものの地位が上昇したこと、「遠心的段階」における「ベルギー文学」の中核を担ったヴラーンデレン系フランス語作家が減ったことなどから、「ヴラーンデレン性」をフランス語で表現する方向性に齟齬が生じたために起こったものである⁸。フランツ・エレンスやシャルル・プリニエらを中心とする「月曜会」は、このフランスへの同化という方針を 1937 年の宣言 (*Le Manifeste du Groupe du lundi*) において明確に表明した。ア・リマイジュ・ノストル＝ダム (*À L'Image Notre-Dame*) は、この月曜会の面々が通ったカフェであり、エレンスやプリニエ、ミシェル・ド・ゲルドロードなどが文学議論を交わしたことで知られている⁹。また、月曜会とほぼ同時期に、ブリュッセルではシュルレアリスム運動が盛んになるが、その議論の場として有名なのが、ラ・フルール・アン・パピエ・ドレ (*La Fleur en Papier doré*) というカフェだ。画家のルネ・マグリットやポール・デルヴォー、詩人のポール・ヌジェといったシュルレアリストが集まり、第二次世界大戦後には、クリスチャン・ドートルモンを中心としたコブラ (*Cobra*) グループも、このカフェに足を運んだ¹⁰。

このように、ブリュッセルのカフェは「遠心的段階」「向心的段階」の両時期において文学・芸術運動と結びついた文士たちの会合場所となったが、1970 年頃になるとそうした役割は大きく低下する。ブリュッセルのカフェの歴史について書いたテレーズ・シモンズらも、次のように述べている。

まぎれもなく、カフェは 20 世紀の大部分を通じて、大衆階級の息抜きの場所になった。しかし、1970 年代以降、事情は変わってくる。テレビの到来、都市からの人口流出、余暇の発展などにより、人々はカフェに行こうとしなくなった¹¹。

シモンズらが扱っているカフェは、必ずしも文学者の集合したカフェだけではないが、いずれにせよ人々がカフェに集まり社交する文化が衰退したことは間違いない¹²。

この変化とほぼ同時期に、ブリュッセルにおける文学シーンも大きく変わるようになる。クリンケンベルクの区分によれば、1970年頃になるとベルギー・フランス語文学の歴史は、「向心的段階」から「弁証法的段階 phase dialectique」へと突入した。1960年代以降、ベルギーではヴラアンデレンとワロニーの対立が激化する¹³。言語問題が国を揺るがす事態に発展したことで、連邦制導入の動きが活発化し、数度の憲法改正を経て最終的に1993年にベルギーは連邦国家になる¹⁴。この一連の流れの中にあつた1970年代には、ベルギーという国家の必然性やアイデンティティについての議論が文学の領域でも熱を帯びるようになるが、その中心的役割を担った人物の一人がメルテンスだ。彼は、1976年に『レ・ヌーヴェル・リテレール』紙上で、「ベルギー人であることの困難について」と題し、「恥じ入らず傲慢でもないベルギー人 Ni Belges honteux, ni Belges arrogants¹⁵」となる必要性を説いた。これは「遠心的段階」において「ベルギー文学」の特殊性を主張した作家たちの一種の「傲慢さ」と、「向心的段階」においてベルギー人であることへの「恥」から「フランス文学」への同化を志した作家たちの態度を揶揄しており、新しい世代のベルギー人のあり方を提唱したものである。フランス語圏文学の専門家、アルメイダの「新しい世代は、フランス語圏のベルギーに、その複雑性や矛盾を受け入れ、和解すること、自身へと立ち返ることを呼びかけた […]」¹⁶という記述からも、メルテンスの世代が「遠心的段階」と「向心的段階」に見られた両極端なベルギー・フランス語文学の傾向を乗り越え、複雑性・不安定性を認めつつも、なお「ベルギー人」であることの重要性を主張したことが分かるだろう。メルテンスの伝記を執筆したジャン＝ピエール・オルバンは、以下のように記している。

それが、これからのメルテンスの挑戦だ。つまり、彼には「ベルギー人であろう [tenter d'être belge]」とすることが必要なのだ！ベルギー人であるかあるいは何者でもないか。独自性ではなく一つの条件であるようなアイデンティティ、ベルジチュードというアイデンティティとともに生きるということ。黒人たちが、ネグリチュードとともに生きようとしたように¹⁷。

このように、メルテンスの唱えたベルジチュードは、ベルギー・アイデンティティの脆弱さ、複雑さという問題を一つの「条件」として受け入れたうえで、他者に依存しない「ベルギー人」を目指したものだ。このスローガンは、フランスによる植民地支配という文脈から生まれたネグリチュードとは確かに位相が異なるものの、ジャヴォーが「サンゴールの真似をすれば十分だった¹⁸」と後に述べているように、自己のアイデンティティを意識する重要性を強調した点で共通していた。ベルジチュード概念には、同世代のブリュッセルの文学者が多く賛同したため、この世代のことを「ベルジチュード世代 La

génération de la Belgitude¹⁹」と呼ぶこともある。

ベルジチュード世代の台頭と、ブリュッセルにおけるカフェ文化衰退の時期が重なっているのは、おそらく偶然ではない。先述の通り、ブリュッセルのカフェ文化を担った作家・芸術家にとって、ベルギー・フランス語文学、そしてベルギー国家・国民のアイデンティティにかかわる問いは、議論の中心にあった。しかし、様々な文学的潮流の形成を促したとはいえ、ブリュッセルのカフェは、「フランス文化」の成立に寄与したパリのカフェとは異なり、確固たる「ベルギー文化」の創造を実現するだけの求心力を持たなかった。ブリュッセルのカフェ文化の専門家であるジュリー・フェッカーも、『若きベルギー』誌の作家たちのカフェでの集いに関して、確かにグループの構成員同士の個人的な関係を強固にするのに役立ったが、「カフェは芸術的創造の場所にはならなかった²⁰」と述べており、ブリュッセルのカフェ文化が、パリと同じレベルで文学・芸術活動に影響を及ぼすことはなかったと言える。この点については第三章でもう一度詳しく考察するが、いずれにせよ「遠心的段階」と「向心的段階」の文学シーンに結びついたブリュッセルのカフェ文化は、上の世代とは異なる新たなベルギー・アイデンティティを模索したメルテンスの世代にとって、もはや重視すべきものではなかったのかもしれない²¹。

しかしながら、ベルジチュード世代の作家にとってカフェ文化自体の重要性がすでに低かったとしても、彼らの作品にカフェが全く見られなくなるわけではない。メルテンスの小説にもカフェ空間はしばしば登場し、それがベルジチュードの概念を具現化する場になっている点にも留意すべきだろう。次章では、その中でも特徴的な作品である『亡命地』を取り上げながら、メルテンス文学におけるカフェ表象とベルジチュードとの関連について考察する。

第二章 『亡命地』におけるカフェ表象とベルジチュード

『亡命地』の主人公ハイメ・モラレスは、冒頭で、ブリュッセルの空港に到着するやいなや、チリからの亡命者として、現地の人々のインタビューを受ける。初対面の彼らからの突然の尋問にモラレスは戸惑いながらも受け答えをしていくが、当惑はインタビューが進むにつれて増していく。それは、質問やコメントの多くが、彼のチリでの生活を実際以上に過酷なものとして決めつけているためだ。「ハイメは、負わされた怪我が履歴書の代わりになる入学試験を受けさせられているような気分になる²²」という一文からもそのことはうかがえる。また、亡命する直前、モラレスはチリの空港で買ったアルコールの瓶を割ってしまい怪我をするが、ブリュッセルでインタビュー後に行われた歓迎セレモニーの最中、その傷口が再び開いてしまう。この場面でも、ブリュッセル人が傷とチリで受けた拷問とを無理やり結びつけているように感じられ、「誤解は絶望的に滑稽なレベルになっていた²³」とモラレスは心情を吐露する。こうしたブリュッセルの人々の反応に対する違和感は、主人公の神経を徐々に擦り減らせていく。

物語の中盤、モラレスはベルギー到着以来常連になっていた、ブリュッセル自由大学付近のカフェ、ア・ラ・バストーシュ (À la Bastoche) に向かう。このカフェでは、普段から学生たちがカード遊びに興じているが、その中で一人見慣れぬ女性がテラス席で本を読んでいるのに彼は気づく。彼女は作家で詩人のフランソワーズ・ラランドという人物なのだが、急にモラレスを呼び寄せて会話を開始する。

彼女[ラランド]は彼[モラレス]が何の仕事をしているのか尋ねた。彼はそのことに喜んだ。なぜなら、この国に来て以来、彼女が、出身地はどこかという問い以外から会話をはじめた最初の人だったからだ²⁴。

モラレスは、ラランドの質問を聞き、ブリュッセルで初めて自身の出身地と無関係に存在を認められ、喜びを覚えている。「不思議な安らぎをハイメ・モラレスは感じた。何が原因かは正確には分からなかったけれども²⁵」という文章にも、そのことは表れている。彼女と会話を始める前に、彼は酔客に話しかけられるが、チリについて「とにかく、本当に遠すぎますよね、あなたの国は。わかりますか?」²⁶と断言される。あからさまに自分に他者性を押しつけようとする酔客の態度と、「亡命者」「外国人」というレッテルと無関係に一個人として自分を認めようとするラランドの態度との対照も、主人公の安らぎや喜びの感情を強める要因になっているだろう。

モラレスは、もともとチリにいた頃は水文学者であり、ラランドに職業を尋ねられたのをきっかけに、チリにいた頃の仕事に関連する出来事や水の重要性について話していく。

[...]ハイメは、自分が興奮し、汗ですでに少しこめかみを濡らしているのに気づいた。そして、彼女がブリュッセルの^{ブロンガ}外人のブロンド女ではなく南のインディオで最も強情な女であるかのように、フランソワーズ・ラランドを説得しようと自分が議論をぶついているのに気がついた²⁷。

『亡命地』において、モラレスが他人に対して熱心に語りかけるのは、この場面が最初である。ブリュッセルに到着してから精神的不調に陥っていた主人公にとって、カフェでのラランドとの出会いは、個人的な他者との関係をこの町で初めて築く経験だと言えよう。それはまた、ブリュッセルの人々が、これまで常に彼を誤解にまみれたチリのクーデターのイメージと結びつけ、その背後にある個人としての人生を無視してきたことの証左でもある。モラレス自身、ラランドとの会話を通じて、そのことに初めて気がつくのである。

では、このカフェでのモラレスの気づきは、メルテンスの主張するベルジチュードの問いとどのようにかかわっているのだろうか。ラランドと出会うまで、ブリュッセルの人たちはみな、主人公に「政治亡命者」「外国人」というレッテルを貼り、常にベルギー人とは異なる他者として扱おうとしてきた。『亡命地』を「他者性」という観点から論じたシル

ヴィオ・フェラーリは、作中におけるベルギー人の態度について次のように述べている。

日に日に、彼[モラレス]は、自身の上ののしかかる、不信に満ちた視線に気付いていく。それは、彼の話し相手であるベルギー人のアイデンティティがそれ自体絶えず疑わしく、あまりに弱いので、ベルギー国民が自己を見出すためには、常によそ者と向かい合うことが必要となるからだ²⁸。

ブリュッセルの人たちが強引にモラレスとチリの血塗られたクーデターのイメージを結びつけようとするのも、彼ら自身のアイデンティティが脆弱であるがために、主人公を「他者」と認識し差異を際立たせる作業を通じて、自らのアイデンティティを確かめることを余儀なくされているからだと考えられる。先述のア・ラ・バストーシュにおける酔客の発言はその典型例だろう。『亡命地』では、モラレスがブリュッセルの学生団体の代表者ヤン・ボンサースという人物と、ベルギーにこれまで来た政治亡命者たちについて話す場面があるが、その中に次のような描写がある。

少しの間、ヤン・ボンサースとハイメ・モラレスは、荷物を持って世界中の亡命者たちが寒そうに肩を寄せ合いながらひしめいている経由地の一室が、民主主義の氷原が、海によってこれほど多くの約束の地から隔てられてしまったかのような島のベルギーが、巨大な控えの間のように眼前に広がるのを見た²⁹。

ブリュッセルの人々は亡命者たちの生きてきた現実に対する無関心、無理解が甚だしい。だから、彼ら亡命者は身を寄せ合って生きていかねばならない。現に、『亡命地』では、南米出身のスペイン話者コミュニティが登場し、モラレスもそこに参加している。「隔てられた島のベルギー」というメタファーには、亡命者に他者性を押しつけるだけで、その具体的現実から切り離され、そこに目を向けられないベルギー人への皮肉が込められているのだろう。そして、その背後には、ベルギー・アイデンティティの不確かさという問題が潜んでいるのである。

同様の問いは、ベルギーの異種混合性という特性とも結びつく。作中に登場する雑誌編集者、ピエール・オーギュスタンは、ベッピーノというビストロで、モラレスに次のように語る。

わかりますか、ハイメ、実は私はこの国が本当に好きなんですよ！それにベルギーには少なくとも一つ大きな長所があります。その場にいても亡命することができるから、離れる必要がないんです。西洋の博物館なんですよ。西洋のすべての豊かさ、すべての価値が、ガラスケースの後ろ側みたいにラベルを付けられ、ここに要約され、隠されているんです³⁰。

「西洋の博物館 le musée de l'Occident」という表現から読み取れるのは、ベルギーがヨーロッパの交差点として多様性を凝縮した場所だということだ。メルテンス自身、ベルギーの地理的・文化的特徴として、「ラテン世界とゲルマン世界の交差」とその「混血性と異種混合性」を他の論考の中で挙げており、それらを意識すべきだと主張しているが、『亡命地』においてこの異種混合性は必ずしも肯定的なニュアンスを帯びていない³¹。「この国が本当に好き」だと言いつつも、オーギュスタンはベルギー人について、「[...]この嫌なヨーロッパの知識人たちは、自らの周辺を取り巻くすべてのものと自分を無縁だと考えていて、他の場所で起きることならどんな場所でも心配し、その心配を通じてしか本当にはくつろげない³²」とも説明しており、ベルギーにおける模範的価値観の欠如と、他者・他所への依存状態を否定的に捉えている。ベルギー・アイデンティティの稀薄さに対する彼のアンビヴァレントな態度は、作家自身とも重なるところだ³³。ブリュッセルに来てから気づいたことについてオーギュスタンに尋ねられたモラレスも、ベルギーには「規準 normes³⁴」が過剰にあり、そのことに人々が苦しんでいるように見受けられると語る。この描写も、ベルギーの異種混合性という特徴が、かえってベルギー・アイデンティティを弱める結果を招いていることの例証だろう。

ベルジチュード世代の文学理論家マルク・カグブールは、ベルギー・フランス語文学に関して「[...]我々の作家たちの作品は、穴のあいたアイデンティティ (identité en creux) を浮き彫りにしている³⁵」と述べている。「穴のあいた」という表現は、他者との区別によってしか自己のアイデンティティを確かめられないベルギー人の状況を示していると考えられよう。ア・ラ・バストーシュにおいてモラレスが確認した、よそ者の個人的な現実に対するブリュッセル人の根本的な無理解の背景には、こうしたベルギー・アイデンティティの問題が潜んでいるのである。このように考えると、主人公とラランドとの出会いの場所となるカフェは、彼にとってベルギー人のアイデンティティを理解するための一つの重要なステップになっていると捉えられる。そして、この理解は作者自身のベルジチュードの主張と直結するものだ。外国人であるモラレスの視点を通して、確固たるアイデンティティでもなく、フランス人と区別不可能なものでもない、不安定なベルギー・アイデンティティの実態を描き出そうというメルテンスの姿勢を、カフェの描写から読み取ることができるだろう。

『亡命地』に見られるこうしたベルジチュードの問題、ベルギー・アイデンティティの脆さの問題は、「歴史」に対する作家の問題意識と密接にかかわっている。前述の通り、ア・ラ・バストーシュにおいてモラレスは、ブリュッセルの人たちがこれまで自身の個人的な人生へ関心を全く寄せて来ず、抽象的な「亡命者」「外国人」としてしか扱ってこなかったことを理解するわけだが、これは彼らが集団レベルの「歴史 l'Histoire」の裏にある、個人レベルの「物語 l'histoire」への想像力を欠いていることを意味する。言い換えれば、ベルギー人が、この二つのイストワールの間に接点を見出せない状況を描いているとも捉えられるだろう。

カフェでのラランドとの出会いのおかげで、モラレスは一時的に安心感や喜びを覚えるが、その感情は結局長続きしない。後半部において、主人公はブリュッセルで知り合ったチリ人外交官アウレリアノの突然の訃報に接する。彼の妻ベアトリスというベルギー人女性に対し、モラレスは、ブリュッセルやそこに住む人々に関する不満を表明する。

何ヶ月かの間に、私はやる気をまったく失ってしまいました——自分を何度も責めましたが何も変わりませんでした——やる気を失ったのは、私がどこにも住んでいなかったからです。いまや自分がどこに辿り着いたのか知りたいですよ。それから、もし私に権限があったなら、亡命者たちに、自身について、そして社会的な出来事の中で自分たちがかわった箇所について話すことをもう一度学ぶよう言うんですが。言っていることと言わずに済ませられること、どこまで個人の物語 [histoire individuelle] の関係にふみこめるかを示すコードを待つまでもなく。そうすれば、われわれもいつか自分たちに何が起こったかをはっきりさせられる機会をまだ持つことができるでしょう。われわれの物語が完全に奪われてしまうこともないはずですよ³⁶。

同じ場面に見られる「私は概念の国に辿り着いたんです³⁷」という発言からも分かるように、モラレスは、ベルギーという国を実体のない場所だと結論づける。そこで生活する亡命者たちは、「個人の物語 *histoire individuelle*」とチリにおけるクーデターのような「社会的出来事 *les événements*」との関係性について、沈黙を余儀なくされている。それは、ベルギー人が「[...]われわれ[モラレスなどの亡命者たち]の苦しみについて、まるでその苦しみが幽霊のものであるかのように話³⁸」すからであり、結局「歴史 *l'Histoire*」の背後にある「個人の物語 *histoire individuelle*」に対する無理解、無関心が顕著だからだ。

二つのイストワールの問題は、後のメルテンス文学の中で重要な位置を占める問題でもある。例えば、1987年発表の小説『眩暈 *Les Éblouissements*』の初版の裏表紙に見られる次の文章はそのことを証明している。

もちろん、あるフィクションについて述べるために。フィクション以外の何物でもないものを。ある人生の誤りを、そしてある誤りの人生を語るようなそんなフィクションを。大文字のイストワール [Histoire] と小文字のイストワール [histoire] の間の一番の近道、それはなお想像することだ。伝記作者は、ここでは歴史家になる選択以外持たないし、年代記作者は小説家になる以外の手段を持たない。しかし、小説家だけは、自身が詩人だという自覚を見出す可能性を持つのである³⁹。

『眩暈』は、ドイツの詩人ゴットフリート・ベンの生涯をもとにした小説だが、その伝記的性質にもかかわらず、あえてメルテンスは、この作品がフィクションであると主張する。小説家を自任するメルテンスは、二つのイストワール（この場合はベン個人の人生と

彼の生きた時代の集合的な歴史を指す)を「想像」によって近づけることこそ、自らの使命と捉えている。「物語 l'histoire」を創作することで、「歴史 l'Histoire」の中にそれを組み込んでいく、あるいは逆に「歴史 l'Histoire」を出発点に個々の「物語 l'histoire」を紡ぎだしていくことが、彼にとってのフィクションの意義だと言えるだろう。

フィクションに対するこのようなメルテンスの考え方は、『亡命地』におけるベルギー・アイデンティティの問題とも重なる。チリのクーデターという集合的「歴史 l'Histoire」とその背後にある個人の「物語 l'histoire」を結びつけることができないベルギー人の姿は、彼らがフィクションを想像・創造する能力の欠如を意味していると捉えられるだろう。メルテンスは後に、ある講演の中で「ベルギーにおいて、われわれは一種の否定的な虚言症に苦しんでいるのかもしれませんが。歴史を持っていないという夢を見ているのです⁴⁰」と述べる。共通の「歴史」を持たないベルギー人のイメージはそのアイデンティティの稀薄さ、そして二つのイストワール間に接点を見つけれない彼らの姿に対するメルテンスの認識とつながっているが、こうしたベルギーにおける歴史の不在という思考を、彼は「虚言症」として斥けている。ベルギー人の「歴史」意識の弱さがアイデンティティの不安定さを生み、そのことがフィクションの想像・創造の足かせになっている状況に対し、小説家としてメルテンスは異議を唱えているのだろう。ベルギー・アイデンティティの弱さを認めつつも、なおその「歴史」の問題とそこから派生するフィクションの問題へ踏み込もうとする姿勢は、「ベルギー人」であることにこだわるベルジチュードの主張と根本において同一である。このように、ベルジチュードの問題は、メルテンス文学において不可欠なテーマである「歴史」とフィクションの問題と根源的に一致している。そして、『亡命地』においては、その問題意識を具現化する場所の一つとして、カフェが重要な役割を担っているのである。

第三章 メルテンス文学とカフェ空間

メルテンスは、後の大作『王の平和』でも、ベルギー・アイデンティティの探究へと主人公を駆り立てる場としてカフェ空間を機能させている。作者本人の投影とも言える語り手ピエール・レイモンは、ある日、ブリュッセルのカフェのテラスでジョイ・ストラスバーグという女性と出会う。父親がオーストリア出身のユダヤ人であるジョイは、「歴史」と自らの起源の問題に深い関心を抱いているが、彼女との出会いをきっかけに、語り手は自らの少年時代、そして子供の頃に自転車事故の際に遭遇したベルギー王レオポルド三世の個人史、さらには「ベルギー史 l'Histoire belge」という三つの過去の再構築へと乗り出していく⁴¹。レイモンは、旅行代理店のライターであり、自らとレオポルド三世の個人的な「物語 l'histoire」と「歴史 l'Histoire」をともに明らかにすべく、代理店の機関誌に執筆することを決めるが、語り手は次第に自らの試みに自信を失っていく。

ここに来て、私のテーマはだめになってしまいそうだ。ここに来て、私は、「歴史 l'Histoire」の行き詰まり、うんざりさせるようなくり返し、意味のない矛盾、もう明らかにしたいとさえ思えないような謎のせいで失望してしまっている⁴²。

この描写は、レオポルド三世の復位に関する論争について書こうとした際のレイモンの心情だが、「歴史 l'Histoire」があまりに「謎」に包まれているせいで、自身の明らかにしたい「物語 l'histoire」の全てを説明することはできないと気付いた失望を表している⁴³。語り手は、この後「歴史 l'Histoire」と「物語 l'histoire」の両者の統合を図るべく、フィクションという手法へと切り替えようとする。だが、この場面より前に、ジョイは「あなたと違って、私はあまりフィクションを信用していないんです…。真実を言っているという口実で時々 […] フィクションってそれを残酷に折り曲げるじゃないですか⁴⁴」とレイモンに語っており、多くのベルギー人が小説というジャンルに信用を置いていないことに対して、彼は再び失望する。「二つの陣営のどちらにも、一人として作家はいないし、この身の丈に合った悲劇を言葉に落とし込むのだって、ただ歴史家だけだ…。あるいはまた創意に富んでいたからではなく想像力の欠如のために、ほかのことを話しているかだ⁴⁵」という語り手の独語に見られる、ベルギー人の想像力の欠如とそれを原因とする作家の不在は、『亡命地』におけるベルギー・アイデンティティの問題と重なる。結局、レイモンの試みは挫折するが、これもベルギー・アイデンティティの曖昧さ、そこから生じる「歴史 l'Histoire」と「物語 l'histoire」の統合の不可能性、そしてフィクション創出の不可能性といういずれも『亡命地』の分析において検討したテーマを発展させたものと考えられよう。

このように、カフェにおける他者との出会いを契機として、主人公がベルギー・アイデンティティへの理解を深めていく点で『亡命地』と『王の平和』は共通しているが、なぜメルテンスはベルジチュードに関する問いを導く空間としてカフェを選んでいるのだろうか。

哲学者ティエリー・パコはハーバーマス哲学における「公共空間 l'espace public」の議論を援用しながら、カフェは本来「公共空間」の一形態であると述べている。彼は、この概念について以下のように説明する。

公共空間は、集合的生活の本質的な機能——すなわちコミュニケーションという機能——を満たす。それらは、基本的な都市的優雅さの実現を助け、匿名の寄付のように、相互性も予期されぬうちに、他者性を受け入れる。自己が他者を体験するのは「公共空間」においてだ。各々が他者の奇妙さのうちに、自他の差異の保証に気づくのも、この「公共」と言われる「空間」においてである⁴⁶。

パコは、そのうえで、特に 18、19 世紀のフランスやイギリスにおいて、「公共空間」

は社交を通じて「個々の私的な意見を公のものにすることを可能にしてくれる⁴⁷」場であったと記している。「公共空間」の一つであるカフェが、他者との出会いを通じて予期せぬ社交のきっかけを提供しそこから自他の差異に気づかせてくれる場所であり、かつ他者同士である各々の私的な意見が統合されて公の意見を創造する可能性を秘めた場所であるならば、そこでの会話や議論のおかげで他者との差異や自己のアイデンティティを確認することが可能になり、他者同士である個人の意見の衝突やその総合から、確固たる文化・政治的潮流、「世論 l'opinion publique」が育まれる期待もできる。実際にパリでは、18世紀以降20世紀半ばにかけて、カフェでの議論が、多くの政治や文学・文化運動の醸成に寄与し、集合的な変革を生む足掛かりをつくった⁴⁸。

一方、第一章ですでに述べたように、ブリュッセルでは確かにいくつかの「文学カフェ」が誕生し、「遠心的段階」「向心的段階」のそれぞれの時期における文学的潮流を映し出す場所になったが、その求心力はパリのカフェに比べると弱く、確固たる「ベルギー文学」や「ベルギー文化」を形作ることはなかった⁴⁹。このことは、ブリュッセルにおいて、カフェがパコの言う意味での「公共空間」として成長しなかったことを意味しているだろう。ブリュッセルでカフェの数が増えるのはそもそも19世紀後半以降であり、それまで大衆階級の集まる小型飲食店エスタミネは多く存在したものの、文学者や芸術家の集合場所としてのカフェの歴史は他のヨーロッパの都市に比べて浅い⁵⁰。そのうえ、前述のフェッカーも、『若きベルギー』誌の作家たちのカフェでの集いについて以下のように述べている。

そこにいるグループ[『若きベルギー』誌の作家たち]が文学者集団として示されるような公の空間として、飲み物を販売する店は、結局『若きベルギー』誌の作家の活動にかかわる態度の表明において特権的な場所の一つであった。つまり、潜在的な読者との直接のふれあいと同様に、都市の中での可視化を通じ、カフェはブリュッセルにおいて、彼らの認知の一ステップになったのである⁵¹。

このように、カフェは、ブリュッセルの文学・芸術活動において、都市の風景の中で文学者の存在をアピールする一種の演出の場としての意味合いが強かった。「文学的舞台」としてのカフェの役割は19世紀のパリのカフェにも確かに見られるものの、それらは基本的には知名度の低いポヘミアン作家・芸術家が認知されるためのパフォーマンスの場というニュアンスを帯びていた⁵²。そもそも、職業作家がそれまでほぼ存在しなかったベルギーとは異なり、文学者の存在自体を演出によって認識させることは、フランスでは必要なかったであろう⁵³。パコは、「公共空間」について「多様な意見の流通⁵⁴」の場という側面も重視しているが、19世紀ブリュッセルのカフェで真の意味での芸術的創造が発展しなかったことを踏まえると、「公共空間」の一要素をなす他者との交流の中で、こうした「多様な意見の流通」が不十分だったために、他者認識が十全に育まれなかった結

果、彼ら自身のアイデンティティが宙吊りのままになったと考えることもできるかもしれない。自己をアピールする演出を行わねばその存在自体が認知されづらい「ベルギー人作家」のアイデンティティの脆弱さが、ブリュッセルのカフェ文化の歴史を紐解くことで露わになってくると言えよう。ブリュッセルの文学シーンにおける「遠心的段階」から「向心的段階」への移行も、「ベルギー人作家」の立場の曖昧さが 20 世紀に入って変化しなかったことの証左だとも考えられる。

以上のようなブリュッセルのカフェ文化についての考察から見えてくるのは、カフェに集まるベルギーの作家たちが「歴史 l'Histoire」と「物語 l'histoire」を結びつけられなかったという実態である。つまり、パリのカフェ文化とは異なり、ベルギー・フランス語文学史のどの段階においてもブリュッセルのカフェ文化は、個々の作家や芸術家の人生、「物語 l'histoire」を統合し、全体として一つの確固たる「ベルギー史 l'Histoire belge」を生み出すだけの求心力を持たなかった。それは、ブリュッセルのカフェが、パコの説明する意味での「公共空間」としての役割を十全に果たせなかったということだ。メルテンスが述べているように、二つのイストワールの断絶がフィクションの想像・創造の不可能性へとつながるのであれば、ブリュッセルのカフェにおける「公共空間」形成の失敗は、結果的に「ベルギー人」によるフィクション創造の挫折を意味するだろう。先述の『王の平和』の引用中にある、ベルギーには「一人として作家はいない」という文章が、メルテンスのそうした認識を証明している⁵⁵。『亡命地』に関して前章で分析したいくつかの描写も、ブリュッセルの人々が確固とした「ベルギー史 l'Histoire belge」を生み出せなかったがために、「歴史 l'Histoire」が抽象にとどまり、その向こうにある他者の「物語 l'histoire」を理解できない様子を表しているが、それは自己のアイデンティティが曖昧なためにフィクションを想像・創造できない、ブリュッセルのカフェ文化史に見る「ベルギー人作家」のイメージと重なる。つまり、ブリュッセルではカフェ空間自体が、メルテンスの小説において重要なベルギー・アイデンティティの問い、すなわちベルジチュードの問題を体現する場という側面を有していたのである。

このように考えると、メルテンスがベルジチュードの問いを導き出す場所としてカフェ空間を描くのも当然だと言えよう。ベルジチュード世代の活躍した「弁証法的段階」において、ベルギー・アイデンティティの脆弱さはすでに認めざるを得ないものであった。確かに、上の世代とは異なるアイデンティティのあり方をメルテンスは模索したが、ベルギー・アイデンティティの複雑さやベルギー人であろうとすることの困難という彼のベルジチュード概念の中核をなす部分は、結局のところ「文学カフェ」世代の文学的潮流に負っている。それでもなお他国人に依存しない「ベルギー人」を自任する姿勢は、フィクションを二つのイストワールの結合に見るメルテンス独自の観点から生まれたものだ。再三述べてきたように、メルテンスの考えでは、フィクションの不可能性は、アイデンティティの稀薄さゆえに、「歴史 l'Histoire」と「物語 l'histoire」を想像・創造によって結びつけられないベルギー人の状況に起因する。そのため、ベルジチュード概念の核心部

分である「ベルギー人」であろうと意識することは、最終的にはフィクション創造の可能性、ひいては「ベルギー人作家」であることにつながるだろう。ブリュッセルのカフェ文化の歴史から見えてくるのは、カフェでの文学・芸術議論が、結果的に真の意味での「ベルギー人作家」の誕生に貢献しなかったという事実である。

メルテンス自身がこの現実をどの程度意識していたかは定かではない。実際、ラランドのような作家が足を運んでいるとはいえ、『亡命地』に登場するカフェは文学者が議論する場ではないため、「文学カフェ」と呼ぶのは不適當だろう。しかし、『眩暈』には、第一次世界大戦中のブリュッセルの「文学カフェ」の描写が存在し、『王の平和』の後半部にも、すでに「文学カフェ」の役割を失っていた1990年代のラ・フルール・アン・パピエ・ドレが登場することを踏まえると、メルテンスがブリュッセルにおけるカフェ文化と「ベルギー人作家」との関係に無関心だったとは考えにくい。また、彼は、作家としてデビューする前の1950年代末、ラ・フルール・アン・パピエ・ドレにおいて、当時フランスの出版社で働いていたポール・ペリーという人物と出会い、作家ジャン・ケロールを紹介してもらった。ケロールと知り合ったことが、結果的に後の処女作『インドまたはアメリカ *L'Inde ou l'Amérique*』の出版につながったことを踏まえると、「文学カフェ」における他者との巡り会いを軽視していたわけではないだろう⁵⁶。ベルジチュード世代にとって「文学カフェ」が過去のものになっており、芸術議論に花を咲かせることがすでに時代遅れになっていたとしても、カフェの他者との邂逅の場という機能が完全に消えることはなかった。こうしたカフェの役割をメルテンスは重要視しているからこそ、『亡命地』でも『王の平和』でも偶然の出会いがベルギー・アイデンティティの問題という彼の小説に不可欠な問いを導ききっかけになっているのかもしれない。いずれにせよ、メルテンス文学において、カフェ空間は、ベルギー・アイデンティティの問題、そして自身のベルジチュード概念を具現化する役割を担っているのである。

おわりに

以上のように、メルテンスの小説、特に『亡命地』において、カフェ空間は、他者との出会いを通じて、ベルギー・アイデンティティをめぐる問題を導き出す場所として機能している。ア・ラ・バストーシュというカフェにおいてモラレスが理解するのは、ベルギー人が「歴史 *l'Histoire*」の背後にある個人の「物語 *l'histoire*」に対する想像力を欠いている事実であり、そのことは後の小説『王の平和』では、「ベルギー人」によるフィクションの不可能性というイメージへと発展している。これらの描写の背後には、常にベルギー・アイデンティティの稀薄さという問題が潜んでおり、メルテンスはその不安定さを認めつつも、なお「ベルギー人作家」であるために、「ベルギー人」「ベルギー人作家」を取り囲む社会の病弊を批判的に描き出しているのだろう。そして、ベルジチュードにかかわる問いを導き出す場所として作家がカフェを選んでいるのも、ブリュッセルにおいて、カフェ

文化の歴史自体がこうした社会の病弊を体現してきたからなのかもしれない。

『眩暈』には、あるドイツ人作家がブリュッセルのカフェの中で、「よく見てみなさい。ブリュッセルでは、ドイツ人作家の方がブリュッセル人作家より発言し合いますよ⁵⁷」とベンに話す場面がある。ブリュッセルの「文学カフェ」に対する作者自身の認識がこの言葉に凝縮されていると言えよう。ベルギー・フランス語文学とブリュッセルのカフェ文化の歴史的展開が示してきたベルギー・アイデンティティの脆弱さの問題を、メルテンスはベルジチュード概念へと昇華させた。そして、そのベルジチュードの諸相を、小説家は『亡命地』を中心とした諸作品において描き出しているのである。

ピエール・メルテンスの小説に見るカフェ表象と「ベルジチュード」——『亡命地』を中心に

注

1. Marie-France Renard, « Il nous faudrait tenter d'être belges... » (Préface), in José Domingues de Almeida, *De la belgitude à la belgité – Un débat qui fit date*, Bruxelles, P.I.E. Peter Lang S.A., coll. « Documents pour l'Histoire des Francophonies/Théorie », n. 30, 2013, p. 13. なお、日本語訳は以後注記のない限り引用者による。
2. Anne-Marie Pirlot, *Bruxelles et ses cafés*, Bruxelles, Ministère de la Région de Bruxelles-Capitale, 2009, p. 38.
3. 三田順『想像された北方——象徴主義におけるベルギーの地詩学を巡って』（松籟社、2018年）には、「国民文学」という観点から見ると、ベルギーでは、オランダ語文学の方がフランス語文学より先に登場したことが述べられている。オランダ語圏において、1838年発表のヘンドリック・コンシアンズ『ヴラアンデレンの獅子、あるいは黄金拍車の戦い』が最初の「ヴラアンデレン民族の文学」となったのに対し、ベルギー・フランス語文学の誕生は、1867年のシャルル・ド・コステールの『ヴラアンデレンと諸国におけるユーレンスピーゲルとラム・フトザクの伝説及び英雄的で楽しく且つ華々しい冒険』の出版を待たねばならなかった。
4. Julie Fäcker, « Lieux d'écrivains – Le café dans la construction posturale des Jeunes Belgique », in Paul Aron et Laurence Brogniez (dir.), *Bruxelles, une géographie littéraire (Textyles, n. 47)*, Bruxelles, Samsa, 2015, p. 111.
5. 例えば、ジョルジュ・ローデンバック『死都ブリュージュ』では、ヴラアンデレンの都市ブリュージュ（ブリュッヘ）の「死の都」「カトリックの町」「悲しい町」といったイメージが前面に押し出されており、この時期の「ベルギー文学」の典型的作品と言えらる。また、英語でフランダーズ (Flanders)、フランス語でフランドル (Flandre) と言われる、ベルギー北部のオランダ語圏に関して、本稿では現地語の発音に近いヴラアンデレン (Vlaanderen) という語を用いることにする。
6. Benoît Denis et Jean-Marie Klinkenberg, *La Littérature belge, précis d'histoire sociale*, Loverval, Labor, coll. « Espace Nord », 2005, p. 65.
7. *Ibid.* なお、前掲の三田順『想像された北方——象徴主義におけるベルギーの地詩学を巡って』によれば、この「遠心的段階」と「向心的段階」について、クリンケンベルクは当初正反対の使い方、つまりベルギーを「中心」と捉え、「ベルギー文学」創設段階の1920年頃までの時期を「向心的段階 phase centripète」、多くのベルギー人作家がフランスに同化するその後の時期を「遠心的段階 phase centrifuge」としていたが、依然フランス語圏において圧倒的に強いフランスの影響を鑑み、2005年の本書によって使用法を変えた。
8. José Domingues de Almeida, *De la belgitude à la belgité – Un débat qui fit date, op.cit.*, pp. 47-48.
9. Anne-Marie Pirlot, *Bruxelles et ses cafés, op.cit.*, p. 39.
10. *Ibid.*
11. Thérèse Symons, Sylvie Lefebvre et Yannik van Praag (dir.), *Estaminets et cafés – Histoires bruxelloises*, Bruxelles, Bruxelles-Fabriques, 2018, p. 18.
12. Anne-Marie Pirlot, *Bruxelles et ses cafés, op.cit.*, p. 40. にも、「文学カフェは今日ほとんど姿を消した」とある。
13. ルーヴェン・カトリック大学紛争は両者の対立を象徴する事件である。1963年に成立した言語法によりオランダ語圏であることが再確認されたルーヴェンにあるルーヴェン・カトリック大学 (Katholieke Universiteit Leuven) では、それまでフランス語表記の書類などが用いられ、フランス語話者の教員や学生も多く在籍していた。この状況に対し、オランダ語話者の学生や教員が抗議し、最終的に1968年に大学が二つに分裂して、フランス語話者のためのルーヴァン・カトリック大学 (Université catholique de Louvain) が、フランス語圏のルーヴァン＝ラ＝ヌーヴに設立されることとなった。(松尾秀哉『物語 ベルギーの歴史』、中央公論新社、2014年、157-162頁を参照。)
14. *Ibid.*, 177頁。
15. José Domingues de Almeida, *De la belgitude à la belgité – Un débat qui fit date, op.cit.*, p. 57.
16. *Ibid.*, p. 59.

17. Jean-Pierre Orban, *Pierre Mertens – le siècle pour mémoire*, Bruxelles, Les Impressions Nouvelles, 2018, p. 212.
18. Claude Javeau, « Le chocolat de Trois-Rivières », in Jacques Sojcher (dir.), *La Belgique malgré tout*, Bruxelles, Revue de l'Université de Bruxelles, 1980, p. 212.
19. Marc Quaghebeur, « Au creuset du moderne, du politique et du soi : la Belgitude », in Marc Quaghebeur et Judyta Zbierska-Mościcka (dir.), *Entre belgitude et postmodernité – Textes, thèmes et styles*, Bruxelles, P.I.E. Peter Lang S.A., coll. « Documents pour l'Histoire des Francophonies », n. 41., 2015, p. 26.
20. Julie Fäcker, « Lieux d'écrivains – Le café dans la construction posturale des Jeunes Belgique », *op.cit.*, p. 120.
著述家でヨーロッパのカフェ文化に詳しいジェラルド＝ジョルジュ・ルメールも、ブリュッセルについて「その近接性にもかかわらず、パリで発展したようなカフェの精神からこれ以上にかげ離れた都市を想像するのは難しい」と述べており、ブリュッセルのカフェ文化がパリと同じ規模で花開くことはなかった。(Gérard-Georges Lemaire, *Les Cafés littéraires*, Paris, La Différence, 2016, p. 489.)
21. ブリュッセルのカフェ文化を直接批判するようなメルテンスの発言は、管見の限り存在しない。しかし、「文学的アンガージュマンについて」(Pierre Mertens, « À propos de l'engagement littéraire » in Jean Florence et Marie-France Renard (dir.), *La Littérature : réserve de sens, ouverture de possibles*, Bruxelles, Presses de l'Université Saint-Louis, 1999, pp. 11-35) という論考の中で、メルテンスは、ジャン＝ポール・サルトルらがパリのカフェに集合し、社会正義のために署名運動を行っていたことに対して否定的な立場を表明している。この発言は、カフェにおける芸術や文学にかかわる議論を否定したものではないが、少なくとも彼がカフェに集まる文学者を無条件に賞賛したのではないと言うことはできる。
22. Pierre Mertens, *Terre d'asile*, Bruxelles, Communauté française de Belgique, coll. « Espace Nord », 2012, p. 17.
23. *Ibid.*, p. 28.
24. *Ibid.*, p. 131.
25. *Ibid.*
26. *Ibid.*, p. 130.
27. *Ibid.*, p. 133.
28. Silvio Ferrari, « L'Expérience de l'Altérité comme découverte de soi : la figure de Jaime Morales dans *Terre d'asile* de Pierre Mertens », in *Francofonía*, n. 9, Cadix, l'Université de Cadix, 2000, p. 107. 以下の URL で公開されている。
[<https://rodin.uca.es/xmlui/bitstream/handle/10498/8243/1461604x.pdf?sequence=1>]
29. Pierre Mertens, *Terre d'asile*, *op.cit.*, pp. 126-127.
30. *Ibid.*, p. 121.
31. Pierre Mertens, « Pour en finir avec la belgitude », in Hugues Dumont, Christian Franck, Jean-Louis De Brouwer, *et al.* (dir.), *Belgitude et crise de l'État belge*, Bruxelles, Presses de l'Université Saint-Louis, 1989, pp. 239-248. 以下の URL で公開されている。[<https://books.openedition.org/pusl/5595>]
32. Pierre Mertens, *Terre d'asile*, *op.cit.*, p. 120.
33. エスパース・ノール文庫版の『亡命地』のあとがきを書いているミシェル・グロダンは、ピエール・オーギュスタンについて、「作者自身の化身 *avatar de l'auteur lui-même*」と記し、両者の同一性を強調している。(*Ibid.*, p. 250.)
34. *Ibid.*, p. 122.
35. Marc Quaghebeur, *Balises pour l'histoire des lettres belges de langue française*, Bruxelles, Labor, coll. « Espace Nord », 1998, p. 22.
36. Pierre Mertens, *Terre d'asile*, *op.cit.*, p. 235.
37. *Ibid.*, p. 234. メルテンスは、1995 年出版の小説『王の平和 *Une paix royale*』でも、ベルギーのことを「誰もい

ピエール・メルテンスの小説に見るカフェ表象と「ベルジチュード」——『亡命地』を中心に

ない場所 no man's land」と表現しており、このイメージはメルテンス文学に共通するベルギー観だと考えられるだろう。(Pierre Mertens, *Une paix royale*, Loverval, Labor, coll. « Espace Nord », 2006, p. 336.)

38. Pierre Mertens, *Terre d'asile*, *op.cit.*, p. 234.
39. Pierre Mertens, *Les Éblouissements*, Paris, Seuil, coll. « Fiction & Cie », 1987, quatrième de couverture.
40. Pierre Mertens, « Pour en finir avec la belgitude », in Hugues Dumont, Christian Franck, Jean-Louis De Brouwer *et al.* (dir.), *op.cit.*
41. 『王の平和』におけるカフェ空間の機能についての詳細な考察は、拙稿「Le café dans *Une paix royale* de Pierre Mertens – autour de la reconstruction de “l’Histoire belge”」(『れにくさ』、n. 10、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室編、2020年、220-232頁)を参照。
42. Pierre Mertens, *Une paix royale*, *op.cit.*, p. 318.
43. レオポルド三世は、第二次世界大戦中、政府の意に反して早々にナチス・ドイツに無条件降伏した。戦後、王は復位の意志を表明するが、これに対し国を二分するほどの論争が起こった。ワロニー地域とブリュッセルでは半数以上の人々がレオポルド三世の復位に反対したのに対し、ヴラールデンの人々の大半は賛成を表明したため、この問題は言語間の対立も相まって激しさを増した。騒動を重く見たレオポルド三世は、結局王子のボードゥアン一世に譲位し、「国民投票によって国内の民族的亀裂を露呈させることはなかったが、戦後復興のなかでベルギーの統一は維持された」。(松尾秀哉『物語 ベルギーの歴史』、*op.cit.*, 124-125頁)
44. Pierre Mertens, *Une paix royale*, *op.cit.*, p. 152.
45. *Ibid.*, p. 332. なお引用中に見られる「二つの陣営」という表現はヴラールデンとワロニーのことを指している。また、「身の丈に合った悲劇」とは、レオポルド三世の復位にまつわる論争から最終的に王が退位を余儀なくされた事態を意味しており、国としてのアイデンティティが不安定なベルギーにとって、真の王が存在することは難しいというレイモンの認識を示している。
46. Thierry Paquot, *L'Espace public*, Paris, La Découverte, coll. « Repères », 2017, p. 7.
47. *Ibid.*, p. 11.
48. 例えば、ジェラルド・ルタイユール『パリとカフェの歴史』(広野和美・河野彩訳、原書房、2018年)には、フランス革命前夜のカフェについて「パレ＝ロワイヤルのアーケードの下にあるカフェというカフェは、政治熱に取りつかれた神経質で興奮した群衆に占領された」(114頁)とある。また、1950年代のカフェについても、「一九五〇年代末期は、カーヴやカフェで「実存主義者」の波が絶頂に達した時期である。実存主義思想の評判は国境を越えて遠くまで届いた」(409頁)とあり、18世紀から20世紀半ばにかけて、パリのカフェが政治や文学の領域で強大な影響力を持ち、変革をもたらしたことが分かる。
49. 「文学カフェ」という語の意味は一義的ではないが、ここでは菊盛英夫の以下の文章を参考に、「文学者たちがそこに集まり、文学・芸術について議論して新たなアイデアを創造したカフェ」と考えることとしたい。

またあるカフェは、詩人や小説家や批評家が文学上の議論に明け暮れる閉じられた場所でもあった。いつも騒々しく、しばしば無作法な議論が沸騰して、婦人たちは逃げ出した。そういうカフェのことを、いつしか世間は「文学カフェ」と呼ぶようになった。(菊盛英夫『文学カフェ』、中央公論社、1980年、54頁)

50. Anne-Marie Pirlot, *Bruxelles et ses cafés*, *op.cit.* には以下のような記述がある。

ブリュッセルでは、カフェは遅れて登場し、エスタミネが少しずつこの現代的な発明に取って代わられるには、19世紀後半を待たねばならなかった。すぐにエスタミネの客層よりもブルジョワかつ

インテリの客層に好まれ、カフェは都市中心部の上流階級の多い地区につくられた。(p. 12.)

51. Julie Fäcker, « Lieux d'écrivains – Le café dans la construction posturale des Jeunes Belgique », *op.cit.*, p. 121.
52. Vincent Laisney, « Cénacles et cafés littéraires : deux sociabilités antagonistes », in *Revue d'histoire littéraire de la France*, n. 110, Paris, Presses Universitaires de France, 2010, pp. 563-588. (以下の URL で公開されている。
[<https://www.cairn.info/revue-d-histoire-litteraire-de-la-france-2010-3-page-563.htm>]) にはパリのカフェに関して、次のような記述がある。

外部に関心が向けられることで、カフェは何よりもまず文学的「舞台（あるいは闘技場）」として定義される。各自にその才能に応じて、「制度」（サロン、出版社、批評雑誌やアカデミー）という道を通らずとも、即座に認知される可能性（これが高名な「栄誉の仕組み」だ）が与えられるのである。(p. 586.)

このように、カフェは、作家や詩人が、「制度」の外において認知・評価される機会を提供する場所だったという見解が示されている。

53. 岩本和子『周縁の文学 ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷』（松籟社、2007年）には、「最初の正統な作家と見なされたのは、カミーユ・ルモニエ [...] だった。そして、彼を師と仰ぐ「若きベルギー派」の若者たちが、「書くこと」を生を中心におく第一世代となったのである」（132頁）と記されている。このように、少なくとも19世紀末のベルギーではまだ文学者に対する世間の認識が定まっていなかったことが分かる。
54. Thierry Paquot, *L'Espace public*, *op.cit.*, p. 3.
55. 注45を参照。
56. Jean-Pierre Orban, *Pierre Mertens – le siècle pour mémoire*, *op.cit.*, pp. 183-190.
57. Pierre Mertens, *Les Éblouissements*, *op.cit.*, p. 102.

Le café et la « belgitude » dans les romans de Pierre Mertens— le cas de *Terre d'asile*

Eiji Yamauchi

Pierre Mertens (1939-), l'un des représentants de la littérature francophone de Belgique contemporaine, est connu pour sa notion de « belgitude ». Dans son roman *Terre d'asile*, l'auteur décrit une image des Belges à travers les yeux d'un réfugié politique chilien qui a débarqué à Bruxelles. Le café y fonctionne comme un lieu qui permet au protagoniste de mieux comprendre l'identité belge.

À Bruxelles, la culture du café, associée à la vie littéraire d'écrivains, s'est développée de la fin du XIX^e siècle au milieu du XX^e siècle. Cependant, elle n'a jamais eu la même importance que celle de Paris et le nombre de cafés bruxellois a diminué après les années 1970. En 1976, Mertens s'est réclamé de la belgitude en soulignant la nécessité de « tenter d'être belge », bien qu'il accepte la difficulté de revendiquer l'identité belge. Il a essayé de proposer une nouvelle identité, différente de celle des écrivains de la génération précédente qui se réunissaient au café.

Au milieu de l'histoire de *Terre d'asile*, le protagoniste va à la terrasse d'un café, et une femme inconnue s'adresse à lui en l'interrogeant sur son métier. Ici, le réfugié politique chilien s'aperçoit que, pour la première fois à Bruxelles, quelqu'un s'intéresse à son « histoire individuelle » et que les Bruxellois, jusqu'ici, ne l'ont toujours considéré que comme un étranger qui est fortement influencé par « l'Histoire ». Les Belges, qui ne savent pas imaginer « l'histoire » des autres, imposent l'altérité et les images stéréotypées de « l'Histoire » au protagoniste car leur identité n'est assurée que par la différenciation. Selon Mertens, la fiction se fait grâce à l'imagination des romanciers qui lient « l'histoire » et « l'Histoire ». C'est pourquoi la scène du café révèle l'incapacité des Belges de créer une fiction en raison de leur manque d'imagination. La compréhension du protagoniste à propos de l'identité belge à la terrasse du café constitue ainsi une étape importante pour concrétiser la belgitude, concept ambivalent de Mertens qui accepte le malaise identitaire des Belges.

Dans les faits, le café bruxellois n'a pas suffisamment fonctionné comme un espace public qui sert à établir l'Histoire et la culture belges. Si la rupture entre les deux « h(H)istoires » entraîne l'impossibilité de réaliser une fiction, le fait que les Belges n'ont pas pu établir l'Histoire et la culture belges à partir de leurs discussions au café signifie l'échec de l'invention des fictions par les Belges, voire la difficulté pour eux d'être des « écrivains belges ». La notion de belgitude dont le slogan est de « tenter d'être belge » est peut-être due à cette difficulté. Ainsi, le café bruxellois lui-même est un lieu qui incarne la question de l'identité belge. C'est pourquoi il a pour rôle de matérialiser la notion de belgitude dans les romans de Mertens.